

昭和46年2月1日 第1種郵便物認可
平成15年11月1日発行 第11号 1回1日発行
俳句雑誌 沖 第11号



俳句雑誌[おき]

11月号

沖 発行所

表 曝 し 能村 研三

蘇 鉄 咲 く 花 と 思 へ ば 花 か と も

箱 庭 に 縮 尺 合 は ぬ 雲 と 空

夜 の 秋 自 画 像 の 眼 は 如 何 に 描 く

雷 三 日 屋 敷 櫂 の 育 つ か な

文学展の企画

昨年、私が勤める市川市に「文学プラザ」がオープンした。市川は万葉の昔から手児奈の伝説が歌に詠まれ、近年になっても永井荷風や幸田露伴の終焉の地であったこと、劇作家の水木洋子が亡くなった後、邸宅と文学資料を全て寄贈いただいたことなども開設の大きなきっかけとなった。

企画は歌人の神作光一氏、作家の葉山修平氏、秋山忠弥氏などの参加をいただき運営委員会で協議の上決まるものだが、この九月からは私の発案の企画が採用された。「昭和の俳人、水原秋櫻子と富安風生が詠んだ葛飾」という企画展で、真間の弘法寺の境内には、二人の代表作の句碑が建ち多くの人たちが散策に訪れる場所となっている。昭和の初め、この二人が市川とどのように関わりながら作品を詠んだかを近世から昭和にかけて市川の文芸風土の中で検証した。

ただ、私自身学芸員としての専門知識もなく、単なる行政マンと俳句実作者の立場から検証したものなので、やや素人の視点から見た企画展になってしまったかも知れない。

ただ、秋櫻子が『葛飾』で詠まれ

湖尻 径 荒草 阻む 盆の 東風

郭沫若記念館・四句

逃亡の からくり 出口 そぞろ 寒

ガラス戸に 昭和の 歪み 秋寂びぬ

しつらへの やや 華美すぎて 雁渡し

隠れ家は 表曝しに 秋の 暮

秋櫻子・風生展

自註せし 秋櫻子 風生露の 音

た風景が、小中学生であった時の原風景であったことなど、二人の作品の自註の文章や高浜虚子が弟子たちと吟行した「武蔵野探勝会」でも三回真間山の弘法寺に訪れたことなど、その記録を播くと当時の町の様子が蘇ってきて興味を注がれる。企画展は一月二十八日まで開催されている。

能村 研三



秋風裡

林 翔

宗左近氏を悼む

詩人宗左近氏が永眠されてしまった。同じ市川市内にお住まいだった縁で、「沖」の大会などには来賓として出席されていた。三十五周年大会の折にも来賓として祝辞を頂いたが、休憩時間に氏と歓談したことが忘れられない。

宗氏の逝去は新聞で知ったのだ。葬儀は家族・親族のみで済まされた由も記されていた。

九月十八日、アルカディアア市ヶ谷で「宗左近先生を偲ぶ会」が催された。出席者三五〇名と発表され、大盛会であった。

話は変わるが、私がNHK文化センターの講師をしていた時の愛講者の中にBさんが居た。私が同センターの講師を退いた時、受講者達は「曙俳句会」を創設し、私を指導者に迎えて毎月句会を開いた。Bさんは曙句会のメンバーでもあった。(曙会は今では年一回だけ開いている。)

たゆき身を心は離れ秋風裡

前後左右上下みな霧ケイブルカー

玻璃窓に宝珠千万秋驟雨

芒野のほんのかけらが公園に

月に見せ得ざりし芒飾り置く

虫声を満たし戸締まり忘れぬし

「田園」を聴きつつ偲ぶ豊の秋

子沢山の昔思ほゆ藁ぼつち

席題による幼時回想二句

母の手のぬくみよ新米にぎりめし

莫蔭敷いて「いらつしやいませ」赤のまま

Bさんの夫君は長期の海外勤務であつたが、帰朝されると、Bさんも郷里の福岡市に帰られた。福岡では友人に勧められて「五行歌」という短詩を作る会に入られた。幾つかの作品を私に送つて来られたので、私は宗左近氏の詩集から五行の詩を幾つか選んでBさんに書き送つた。中の一つだけを、ここに記そう。

祈り 宗左近

罪は償いを求めてやみません

罰は愛を求めてやみません

月と地球

祈りあつています

永遠とは 中断されない光です

林 翔



蒼茫集



結 界 湯橋喜美

壮 年 辻直美

「僕もそろそろ」あと秋風に攫はるる
柩閉づ色なき風を封じこめ
夫逝けり露七宝に光る中
秋薔薇死後つぶやきの多くして
過去帳に夫を加へる良夜かな
結界の風のさざ波蜻蛉殖ゆ

水泳部OB壮年の裸身なり
捏鉢に雲のごとくに新そば粉
三三が九夏のをはりは掛算で
尾燈すぐ避暑地の闇に沈むかな
わが命大事に五穀の粟は黄に
新小豆めでたき音を立つるかな

黒 塚 北川英子

虫売りの 酒本八重

しばらくは闇に凭れて送り火あと
天体を招くレンズを磨き秋
四輪駆動一気に登り銀河口
逝く夏の修正液の生乾き
苔も露けき黒塚の夜泣き石
関跡の草樹いんいん一葉散る

虫売りのあをき匂ひを残しけり
みそはぎや仏と同じもの食ぶる
稲の香に育まれゐる保育園
秋風を鋤き込んでゆく鋤づかひ
高麗郷は棲みよし蛙とぶことよ
すつぽりと沼は花野に抱かるる

だるま累々

成宮 紀代子

大暑なり苦き青汁苦く飲み
ひとまはり小さき茶碗に替へ白露
隣人の見まがふ老いや秋暑ふと
納屋ぬちにだるま累々神の留守
水澄みてだるま匠の目見深め
遠寿院の葉性やさしき松手入

厄介な

千田 百里

葛咲くや七情とふは厄介な
新涼の涼計らむと靴を脱ぐ
台風圏電子レンジに廻る酒
更待や吊せば消ゆるズボン皺
縹渺白河句と南湖に座せる羊雲
小峰城より素秋三百六十度

連

峰

望月 晴美

幹といふ幹に蝉みてむず痒し
二万歩の太陽浴びし髪洗ふ

地球儀に子の居場所知る夜の秋
ねたましきほど瑞の艶雨蛙
天高く水面かぐはし南湖かな
晴れつくす連峰柿は色付きて

形見

菅谷 たけし

空蟬といふこの世への形見かな
かくれんぼの鬼へ桐の実ざわと鳴る
みそはぎの田水を揺らすいのちあり
寝そびれて月下美人に痺れぬる
関守山河の関務のごとく鷺草売りの婆
芙蓉咲く達磨居職の十二代

流れの先

藤原 照子

那須白河翁をなぞり豊の秋
先師との足跡の湖爽やかに
髪染めてなにほどのもの秋七草
牧草ロールつぎつぎ生れ天高し
みづうみへ流れの先を天の川
抱かるとも閉ざさるとも霧の湖

潮鳴集

鬼 灯 宮内とし子

色変へぬ松新宮の呱呱の声
避暑便り記念切手にある景色
地の野菜地のソーセイジ牧の秋
お隣もひとりの暮し小鳥来る
鬼灯の赤し少子化進みけり
波の音 大川ゆかり
紙折れば生まるる影や終戦日
逡巡の首の角度に百合咲けり
迎火や眉整へし母のかほ
秋風や引く波の音身に残り
草ひばり闇ひとところ深くする

惑 星 掛井広通

ラムネ玉すたとんと空の落ちて来し
爽やかや地球は海を脱ぎたがり
鯉の口色なき風を食み損ね
石は石のことを思へり秋の暮
虫鳴くや惑星一つ減りし夜も
稲 田 伊藤愛子
稲田ほめ逝きかたをほめ七七忌
胸中にたたむ喪ごころ秋扇
水引の紅が息づく明けの空
澄む水にしぼし十指を遊ばする
秋の空信号待ちのとき高し



沖作品



能村研三選

市川市

諸岡 和子

かなかなや湖の芯より漣す
落蟬の翅焦げさうな照り返し
新涼の衿に封切り化粧水
稲の花父に停年なき暮し
磐梯山に裏や表やそばの花
威銃惑星ひとつ消されけり
こぼれ萩書いてまた消す句読点
迎火にガレージのシャツター開けよ
しまうまに草食といふ涼しさよ
ふりかへり二次元と知る熱帯魚
残暑なほ白光かへす文士像
日蓮像の思惟ひた濡らす蟬の声
野分たつ橋脚へ波たたみ込み
青べか河岸薄は光りつつ開く
月光や藁に微量の硝子質

東京

小嶋 洋子

千葉

安藤しおん

千葉

篠藤千佳子

にはとりの声よく伸びる厄日かな
欄干をたたいて渡る百日紅
冷房のしづけさに置く紙コップ
筆庄の凹凸著し晩夏光
足裏に石のやさしき盂蘭盆会
みんみんや朝市仕舞ふ在ことば
合掌家を小さく汚し燕去る
筆勢ふ龍子河童図涼新た
冷まじき関を揺るがす杉餅
茅葺きの秋気截つかに蕎麦を打つ
寧日や視界の限り秋ざくら
釣瓶落し車立の網の生乾き
やまぐにの星空近き水蜜桃
路面電車大きく曲り街涼し
手の甲に雨の弾ける下り鮎

市川市

代田 幸子

沖作品 15 句選評

*

能村研三

稲の花父に停年なき暮し 諸岡 和子

「停年」と「定年」という二つの書き方があるが、「停年」という言葉の方が古いイメージがある。「定年」という言葉には「停年」より制度的な規制なり規定の度合いが強いようにも感じられる。広辞苑では定年＝停年のように書かれているが、この句の場合は父上の仕事がか社勤めではなく、田舎で農業を営む方なので、やはり「定年」ではなく「停年」という言葉にこだわりたいくなる。今年も稲が穂孕み期に入つていよいよ収穫の時期となつてきたが、米を作る仕事も自分限りで終つてしまうかも知れないと思いつつ、自分の元気なうちは米づくりを続けていこうと信念を持っておられる父上なのだろう。稲の花という季語を旨く効かせた句である。

しまうまに草食といふ涼しさよ 小嶋 洋子

縞馬は中央アフリカの草原に生息し、大きな群れを形成し、

季節的な移動を行う。そして、よくテレビなどで見られるシーンでは、ライオンやハイエナ、ヒョウのような強い動物の餌食になることがある。そのために、駆けるのが速かったり、ライオンなどが近づくのをきつと聞き分けるために耳が大きかったり、あの白と黒のツートンカラーも草原では保護色になるそう。アフリカの草原などの厳しい自然環境の中にあつて他の動物たちが遅くある中で、縞馬だけが何か優しさがあつて、他の動物たちを餌食とせず、草だけを食べる動物だけに見た目も何か涼しさを感じる。

野分たつ橋脚へ波たたま込み 安藤しおん

こうした風景は、陸地の奥深い河川などで見られるものではなく、海の潮が上がつてくるような河口付近の橋で見られる。安藤さんは浦安にお住まいの人であるから、この橋脚も海に近い所を走る湾岸道路や京葉線の橋であることが想像できる。野分が来る気配によつて、風雨が強まり、波浪も高まる。橋脚へも高まつた波がたたみ込むように打ち付けていた。下五の「たたみ込み」という表現にリアリティがあり、しっかりと実際見た景であることが伝わってくる。

にはとりの声よく伸びる厄日かな 篠藤千佳子

地震や台風など自然界の異変には、人間より動物たちとりわけ鳥や鶏、他の鳥たちなどの方が敏感でそれを予知する能力を持つていると思われる。立山などにいる雷鳥なども、荒天のときに鳴き、晴天には黙つているというから、鳥には地震や天気への予知能力に根ざしたものがあるようだ。そういうものを持ち備えているのも、厳しい自然の中で生き抜くための条理でもあるのだろう。

(以下略)